

ビート作家が「豊かなアメリカ」の奥底に 見たもの

——Allen Ginsberg の “Howl” を中心に——

谷 岡 知 美

小説『路上』(*On the Road*, 1957)の作者であるジャック・ケルアック(Jack Kerouac, 1922-69)が、初めて「ビート世代」という言葉を使った話は有名である。1948年、この言葉は、ケルアックと、彼の友人であり、また同じく小説家でもあるジョン・クレロン・ホームズ(John Clellon Holmes, 1926-88)が、「失われた世代」のことを挙げて「世代」の本質について論じていた時、ケルアックが口にした。その後1952年に、ホームズは当時のことを『ニューヨーク・タイムズ・マガジン』(*New York Times Magazine*)に、「これがビート世代だ」(“This is the Beat Generation,” 1952)という表題で見解を述べている。

It was the face of a Beat Generation...It was John Kerouac...who... several years ago...said ‘You know, this is really a *beat* generation.’ The origins of the word beat are obscure, but the meaning is only too clear to most Americans. More than the feeling of weariness, it implies feeling of having been used, of being raw. It involves a sort of nakedness of mind, and, ultimately, of a soul; a feeling of being reduced to the bedrock of consciousness. In short, it means being undramatically pushed up against the wall of oneself. (Holmes 58)

この記事によって始めて、「ビート世代」という言葉が公の場に現れることになった。同じくその年にケルアックは、のちに出版する小説『路上』

の一部となる断片を、『ビート世代のジャズ』(*Jazz of the Beat Generation*)というタイトルのもと、匿名で出版している。このようにして、「ビート世代」という言葉は生まれ、徐々に当時の社会に浸透していくことになる。

次に、「ビート世代」と呼ばれた芸術家たちの活動について述べると、1950年代半ば、サンフランシスコでは、詩人であるケネス・レクスロス(Kenneth Rexroth, 1905-82)やローレンス・ファーリングゲッティ(Lawrence Ferlinghetti, 1919-)の活躍によって、ポエトリー・ムーヴメントが盛んに行われていた。レクスロスは、ビート詩人アレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg, 1926-97)の強力な支持者のひとりであり、ファーリングゲッティは、シティー・ライツ(City Lights Books, アメリカ初のパーバック専門の書店)のオーナーであり、ちょうどサンフランシスコで活動している詩人たちの詩集を出版し始めたところであった。彼らは、カフェテリアやアート・ギャラリーで酒を飲み、ジャズを聞きながら、定期的にポエトリー・リーディングの会を行っていた。のちにこの文学的運動は、サンフランシスコ・ルネッサンスと呼ばれるようになる。そして1954年、ジャック・ケルアックと、小説『路上』の主人公のモデルであるニール・キャサディー(Neal Cassady, 1926-68)、およびアレン・ギンズバーグの3人が、サンフランシスコに引っ越してくる。彼らは、コロンビア大学出身の古くからの友人同士であり、常に詩と同様、芸術そのものに深い興味を持っていた。それゆえ、彼らが、サンフランシスコで行われたポエトリー・リーディングにすぐに参加するようになったのは当然のことである。1955年12月、100人から200人の聴衆が、6人の詩人が自作の詩を読んだポエトリー・リーディングの行われた、シックス・ギャラリーに集まった。その際、詩を最後に発表したアレン・ギンズバーグが、『吠える』("Howl," 1956)の冒頭の1行を読んだ時、聴衆は恐怖と驚きで一瞬の間に啞然となったと言われている。一般的に言って、これが「ビート世代」の運動(ビート運動)の始まりである。

続いて、「ビート」という単語の意味を検証していくと、先に述べた引用において、ホームズは、「ビート」を「ある種の精神の裸、魂の裸の状態」と定義しているにもかかわらず、「ビート」という単語は当時、一般的には「打ち負かされた、疲れ果てた」(beaten)といったような否定的な意味で用いられたようである。その後、ケルアックは『ビート世代の始まり』(*The Origins of the Beat Generation*, 1959)の中で、「ビート」という単語を簡潔に、「貧しく、落ち込んで、仕事もしないなまけものの浮浪者であり、哀れに地下道で寝ている(筆者訳)」(poor, down, and out, deadbeat, on the bum, sad, sleeping in subways)と定義している。さらに、アレン・ギンズバーグは「ビート」という単語について以下の説明をしている。

... the word 'beat,' meaning without money and without a place to stay...So, the original street usage meant exhausted, at the bottom of world, looking up or out, sleepless, wide-eyed, perceptive, rejected by society...Or... meant finished, completed, in the dark night of the soul or in the cloud of unknowing. (qtd. in Waldman 14)

これに加え、ギンズバーグはなぜ「ビート」という単語の意味が否定的にとられたという理由について、メディアの影響が強いと述べている。当時、「打ち負かされた、使い古され」という定義の他に、「ビート」という単語の意味は、ジャズを語る時に使われるような、「ドラムのビート」(the beat of drums)、「ビートが続く」(the beat goes on)といったような、音楽のリズムの動きを表す際にも使われていた。しかしながら、多くのメディアは「ビート」という単語の意味の、音楽の面に目を向けることはなかったと言われている。その理由は、当時ビート運動のなかで「ビート族」(beatnik)と呼ばれた若者たちが、非凡で目立った作品を創作したり、奇抜なライフスタイルを表に出していたからかもしれない。

その結果、ビート運動の初期において「ビート」という単語の意味は、メディアの影響だけではなく、当時の社会的な背景の影響によっても、「打ち負かされた、疲れ果てた」という側面が一般的に強調されたのであろう。以上述べてきたことが、初期の「ビート」という単語の意味であるが、ケルアックは、さらに1958年、「ビート」という単語の意味に新たな定義を加えている。彼は、「ビート」という単語を、「至福、幸福」(beatitude)と結びつけたのである。

このケルアックの新たな意味の発見は、それまで認知されていた「ビート」という単語の意味を大きく広げることとなり、ビート族によるビート運動の活動の幅を、様々な分野、例えば今日の音楽、絵画、映画にわたるまで拡大させた。それゆえ、現在、ビート運動、または「ビート」という単語は、さまざまな文化的活動に言及する際使用され、さまざまな異なった意味を持っているようである。その一部を知るために、アレン・ギンズバーグの説明を引用するのが便利だろう。

So "beat" was interpreted in various circles to mean emptied out, exhausted, and at the same time wide-open and receptive to vision... A third meaning of "beat," as beatific... Kerouac... was trying to indicate the correct sense of the word.... A fourth meaning that accumulated around the word is found in the phrase referred to a group of friends who had worked together on poetry, prose, and cultural conscience.... The fifth meaning of the phrase "Beat generation" refers to the broader influence of literary and artistic activities.... These groups refreshed the Longlived [sic] bohemian cultural tradition in America.

(qtd. in Waldman xv)

ビート世代の代表的詩人である、アレン・ギンズバーグの『吠える』

は、1955年から1956年の間に書かれ、それから1956年に、サンフランシスコで初めて出版された。この詩は、三部から構成され、最後に「脚注」(“Footnote”) で締めくくられている。

『吠える』の第一部において、語り手は、全知の “I” を通して、自らの体験を呼び起こしながら、「ヒップスター」(hipster) と呼ばれる人々の内面的本質を描き出そうとしている。第一部は最初から最後まで、この吠える主体が独特の長い詩行で表現されている。続く第二部は、語り手がシンボルを使いながら提示した、神話的な雰囲気を持って幕を開ける。そこでは、第一部で列挙された「破壊された」語り手の、さまざまな破壊の根本的な原因が描かれている。そして第三部は、カール・ソロモン (Carl Solomon, 1928-) に捧げたエレジーとなっている。『吠える』の献辞にも書かれているカール・ソロモンとは、ギンズバーグの近い友人であり、精神障害者でもあった。この第三部では、ギンズバーグの友人に対する個人的な感情が、激しく現れている。最後の「脚注」は、後に付け加えられたにもかかわらず、『吠える』には不可欠な要素となっているようで、「脚注」では終始聖書の黙示録のような言い回しを用いながら、語り手が、最終的に進べき方向を暗示しているようだ。そして「脚注」はこの詩を終わりへと導く。以下に挙げるのが、『吠える』の冒頭である。

I saw the best minds of my generation destroyed by madness starving
hysterical naked,
dragging themselves through the Negro streets at dawn looking for
an angry fix,
angelheaded hipsters burning for the ancient heavenly connection to
the starry dynamo in the machinery of night,
who poverty and tatters and hollow-eyed and high sat up smoking in
the supernatural darkness of cold water flats floating across the
tops of cities contemplating jazz.... (SP 49)

第一行目において、「僕の世代の最良の精神」⁽¹⁾ (the best minds of my generation) が、すでに「破壊され」(destroyed) ている事がわかる。しかしながら、なぜ、いかに、その「僕の世代の最良の精神」が「破壊された」かという原因や過程についてはまったく触れられておらず、ただ示されているのは、「狂気によって」(by madness) というフレーズだけである。『吠える』の第一部では、「破壊された」あとの「僕の世代の最良の精神」の状態のイメージが、空想的に、しかし現実的に描かれながら、膨らみ、徐々に明らかにされていく。その「破壊された」人びとは、“who...” で始まる一連の詩行で語り続けられるが、語り手は、第一部では、「破壊された」原因や理由、さらに「狂気」がいったい何であるのか知っているにちがいないのだが、決してそれを語ろうとはしていない。読者はその疑問を残したまま第一部を読み続けることになるが、その答えは第二部で提示されていることが分かる。第二部には、ギンズバーグが、なぜ「破壊された」、「狂気」という言葉を使ったのかという理由が述べられているようだ。続いて第二部の冒頭を引用する。

What sphinx of cement and aluminum bashed open their skulls and
ate up their brains and imagination?

Moloch! Solitude! Filth! Ugliness! Ashcans and unobtainable Dollars!
Children screaming under the stairways! Boys snobbing in
armies! Old men weeping in the parks! (SP 54)

引用の第一行目の疑問文は、なぜ「僕の世代の最良の精神」が「破壊された」か、そして「狂気」は何であるのか、の答えを探るための手がかりである。また、第一部の冒頭の一行「僕は見た 狂気によって破壊された僕の世代の最良の精神たちを 飢え苛ら立ち裸で」を思い起こさせる。さらに、「セメントとアルミニウムのスフィンクス」(sphinx of cement and aluminum) は、「狂気」を具体的にイメージ化したものであろう。

さらに、「頭蓋骨を叩き割って」(bushed open their skulls),「彼らの脳みそとイマジネーション食う」(ate up their brains and imagination)という表現は、「僕の世代の最良の精神」を「破壊」という表現と対応すると見て良い。

続く詩行に、「モーラック」(Moloch)という言葉が使用されているが、この言葉は「セメントとアルミニウムのスフィンクス」と同様、象徴的な意味を担わされている。「モーラック」は、旧約聖書に現れる異教の神である。

And thou shalt not let any of thy seed pass through *the fire* Mo'lech, neither shalt thou profane the name of thy God: I *am* the Lord. (Lev. 18:21)

And he defiled To'pheth, which is in the valley of the children of Hin'nom, that no man might make his son or his daughter to pass through the fire to Mo'lech. (II Kings, 23:10)

上記の引用が示すように、「モーラック」は、フェニキア人が子供を人身御供にして祭った神であるが、今日では一般的に、「大きな犠牲を要求するもの」という意味も含まれている。このような意味を持つ「モーラック」を、語り手は『吠える』において、当時のアメリカの、高度文明社会に潜む病巣のメタファーとして用いている。『吠える』における「モーラック」は、特にアメリカでの当時の人びとに精神的打撃をあたえる存在の象徴として用いられているのである。トマス・F・メリル(Thomas F. Merrill)も、「モーラック」を「社会的疾患」(social illness)⁽²⁾と定義している。語り手は、そのような「モーラック」を現実社会のあらゆる場所で目撃する。

Moloch the incomprehensible prison! Moloch the crossbone soulless
jailhouse and Congress of sorrows! Moloch whose building are
judgment! Moloch the vast stone of war! Moloch the stunned
governments! (SP 54)

Moloch! Moloch! Robot apartments! invisible suburbs! skelton
treasuries! blind capitals! demonic industries! spectral nations!
invincible madhouses! granite cocks! monstrous bombs! (SP 55)

語り手は、「ロボットのアパートメント」(Robot apartments)や、「電力と銀行」(electricity and bank)のような現実的なイメージにおいて、また、「盲目の都市」(blind capitals),「怪物の爆弾」(monstrous bombs)のような、不明瞭ではあるが意味を持ったイメージにおいて、「モーラック」を連続して描くことでそのイメージを確立している。これらの詩行から、『吠える』における1950年代のアメリカの社会的背景を理解する際、特に三つの表現、「モーラック、戦争の巨大な石よ」(Moloch the vast stone of war),「モーラック、人を仰天させる政府よ」(Moloch the stunned governments),そして「悪魔的な工業よ」(demonic industries),が重要な鍵となる。これらの表現の中から、三つのキーワード、「戦争」,「政府」,そして「工業」を取り上げることで、1950年代アメリカ社会の概観することができる。

まず、歴史的観点からこれらのキーワードを考察すると、「戦争」という言葉は、1939年から1945年に起った第二次世界大戦、または第二次大戦後に起った、全世界をイデオロギー的に支配した冷たい戦争である、と具体的に考えることができる。先に述べた第二次世界大戦は、『吠える』が書かれた時代に最も近い「戦争」であると同時に、現代の精神になお影響を与えつづけている、人類の歴史上稀に見る大惨事のひとつであり、後者については、『吠える』が書かれた時代の全世界に、強大な力をしめ

していた「戦争」である。次に、「政府」という言葉は、おそらく圧制的、権威的な政治組織——例えば共産主義者を完全に管理するために、アメリカ政府がおこなった支配的措置としての赤狩りなど——を暗示しているようだ。続いて、「工業」という言葉は、20世紀における科学技術の急速な発達によって起った、大企業による大量生産と大量消費の経済システムの著しい促進を表しているのかもしれない。言うまでもないが、これら三つの要素——「戦争」、「政府」、「工業」——は、密接に関係している。つまり、アメリカは、第二次世界大戦での華々しい勝利をえた後、全世界の指導者となり世界をリードする強大国となった。その結果、アメリカは繁栄の道を進んでゆくことになり、社会的にも経済的にも安定した時代へと突入するのである。

トット・ギトリン (Todd Gitlin) は、彼の著作、『60年代アメリカ：希望と怒りの日々』(*The Sixties, Years of Hope, Years of Rage*, 1987) の中で、このようなアメリカの1950年代の経済的、物質的繁栄を、「潤沢」(affluence)⁽³⁾と呼んでいる。ギトリンによると、「潤沢」という言葉は、物質的、精神的の両面において50年代の裕福さを表現するために、頻繁に適用された。この言葉が示すように、彼は、アメリカを、「戦争」によって先進国のほとんどの国、特に西ヨーロッパの国々を圧倒しながら、50年代、世界で最も栄えた国であるとみなしている。このような、50年代のアメリカにおける繁栄した社会は、ギンズバーグの他の詩、「ファン・ゴッホの耳に死を」("Death to Van Gogh's Ear!," 1958) にも描かれている。

Poet is Priest

Money has reckoned the soul of America

Congress broken thru to the precipice of Eternity. (SP 71)

Machinery of a mass electrical dream! A war-creating Whore of
Babylon bellowing over Capitols and Academies! (SP 73)

Money! Money! Money! Shrieking mad celestial money of illusion!
 Money made of nothing, starvation, suicide! Money of failure!
 Money of death!
 Money against Eternity! And eternity' s strong mills grind out vast
 paper of illusion! (SP 74)

これは、「ファン・ゴッホの耳に死を」の始まりの部分と終わりの部分である。この詩は1963年に出版された、『リアリティ・サンドイッチズ』(*Reality Sandwiches*) に収められている。当時ギンズバーグは、恋人であるピーター・オーロフスキー (Peter Orlovsky, 1933-) とパリに滞在していた。ギンズバーグはニール・キャサディーと別れたあと、オーロフスキーと真実の愛を持つことができ、ヨーロッパに旅立ったのだった。ゴードン・ボール (Gordon Ball) が、ギンズバーグのこの旅行は、彼のパースペクティブを幅広く拡張し、補強した⁽⁴⁾ と述べているように、ギンズバーグの、当時のアメリカの状況を客観的に観察するための洞察力は、このヨーロッパ旅行によって洗練されたようだ。

ゴードン・ボールによって編集された、『ジャーナルズ・ミッドフィフティーズ 1954-1958』(*Journals Mid-Fifties* 1954-1958, 1995) には、「ファン・ゴッホの耳に死を」の原稿が掲載されている。

The poet must be priest because now the prophets of money have
 Destroyed the soul of America
 Broken thru Congress to the precipice of Eternity (J 407)

この原稿には、語り手の意図がさらにはっきりと現れているようだ。出版された詩のほんやりと描かれた1行、「ドルがアメリカを勘定した」(*Money has reckoned the soul of America*) は、原稿の、「詩人は僧侶にちがいない なぜなら今ドルの預言者がアメリカの魂を破壊しているから

だ（筆者訳）」（The poet must be priest because now the prophets of money have/Destroyed the soul of America）に基づいている。動詞“is”も、本来は“must be”であり、詩人が力を込めていたことが分かる。ここでも出てくる、「ドル」（money）という言葉は、ただ。交易のための媒体である紙幣を意味しているだけでなく、50年代のアメリカにおける、膨大な物質によって溢れているような文明化した社会そのものを暗示していると考えて良い。原稿からの引用において、「破壊された」という言葉は強調されているにちがいない。ギンズバーグは『吠える』においても、「破壊された」という言葉と「狂気」という言葉を用いている。つまり、「狂気に祝福され金切り声をあげる幻想の紙幣」（Shrieking mad celestial money）と、「ドルがアメリカの魂を破壊している」という二つのフレーズは、『吠える』の冒頭、つまり、「僕は見た 狂気によって破壊された僕の世代の最良の精神たちを 飢え苛立ち 裸で」、という一行に適用することができるのではないだろうか。このようにして考えると、「ドル」は「狂気」を示し、そして「モーラック」が、「僕の世界の最良の精神」、または「アメリカの魂」を「破壊している」と解釈ができるわけである。明らかに、語り手の「ドル」に対する態度は、批判的で否定的である。なぜなら彼は、「狂気に祝福され金切り声をあげる幻想の紙幣」、それが「アメリカの魂を破壊している」と認識していたからである。それゆえ、「ドル」という言葉と、「モーラック」という言葉は両方、語り手にとっては、邪悪で否定されるべきなのである。さらに語り手は、続く詩行において、「無価値なものから 飢えから自殺から作られるドル！ 失敗の金！ 死の紙幣！」（Money made of nothing, starvation, suicide! Money of failure! Money of death!）と非難を続けている。このような語り手の否定的な態度は、「戦争」に関しても見ることができる。

続いて、『吠える その他の詩篇』に収められた、「アメリカ」（“America,” 1956）という一片の詩を取り上げる。

America when will we end the human war?

Go fuck yourself with atomic bomb. (SP 62)

America you don't really want to go to war. (SP 63)

It's true I don't want to join the Army or turn lathes in precision parts
factories, I'm nearsighted and psychopathic anyway.

America I'm putting my queer shoulder to the wheel. (SP 64)

この引用文から、「戦争」にたいする語り手の嫌悪感を見て取ることができる。語り手は、「アメリカ」を、その意思に国民を完全に服従させるような力、権限を持つようなある種の強大な組織として強調して描いているようだ。同時に語り手は、「アメリカよ おまえは本当に戦争には行きたくないのだ」(America you don't really want to go to war)と、「アメリカ」の行動を疑っている。これは、語り手が直面しているであろう、当時のアメリカ社会に対しての、彼の心の中にある当惑感の現れではないだろうか。『ビート世代の人生と文学——裸の天使たち』(Naked Angels, the Lives and Literature of the Beat Generation, 1976)の著者であるジョン・タイテル(John Tytell)によると、実際ギンズバーグは『パリス・レビュー』のインタビューの中で、冷たい戦争における社会と人々について以下のように述べている。

The Cold War is the imposition of a vast mental barrier on everybody, a vast anti-natural psyche. A hardening, a shutting off of the perception of desire and tenderness which everybody *knows*... [creating] a self-consciousness which is a substitute for communication with the outside. This consciousness pushed back into the self and thinking of how it will hold its face and eyes and hands in order to make a mask to hide the flow that is going on. Which it's

aware of, which everybody is aware of really! So let's say shyness.
Fear. Fear of total feeling, really, total being is what it is. (Tytell 6)

1960年代のアメリカでは、さまざまな深刻な出来事が、社会の墮落として目に見える形で起こった。1963年には、合衆国初の WASP ではない大統領であったジョン・F・ケネディが、大統領に選出されたたった2年で暗殺された。そして1968年には、キング牧師、ロバート・F・ケネディらが、人種的、政治的動機によって暗殺されている。さらには、1965年にマルコム・Xも殺されている。このように、当時のアメリカ社会に強い影響力を持っていた人物が続けて殺されていることが分かる。このような社会的政治的背景は、同時に60年代のアメリカ社会に、それまで抑圧されてきた少数派の集団が権利を得るため起こしたいろいろな公民権運動——黒人暴動、学生運動、女性解放運動など——を引き起こすこととなる。これらすべての要素は結果として、アメリカ全体を動揺させることになる。つまりアメリカは、混乱の時代に突入していくのである。ギンズバーグが、先のインタビューで、「皆が気づいていること、本当に気づいていることなんだよ！ええと、それは恥ずかしさと言ったら良いのかな。いや、それは恐怖だ。完全な恐怖の気持ち、本当に、それがまさにそのことだ（筆者訳）」と言っているように、50年代においては、社会の状況は「潤沢」であったにもかかわらず、ある説明し難い陰鬱な予感が、人々の心に影を落としていた。語り手は、『吠える』の第二部が表しているように、そのような、まだ表面には現れていない、影に潜んだほんやりとした不安、つまり「恐怖」を敏感に感じ取っていた。語り手は、このような気持ちの原因として、「モーラック」という言葉を使いながら、50年代のアメリカの荒れ果てた社会を描いたのである。ジョン・タイテルは、さらに50年代の社会、人々の状況を、以下のように鋭く観察している。

Foundlings of the fifties, the Beats were like a slowly burning fuse in a silent vacuum. The postwar era was a time of extraordinary insecurity, of profound powerlessness as far as individual effort was concerned, when personal responsibility was being abdicated in favor of corporate largeness, when the catch words were coordination and adjustment, as if we had defeated Germany only to become “good Germans” ourselves. The nuclear blasts in Japan had created sources of terror, and the ideology of technology became paramount; science was seen as capable of totally dominating man and his environment. And the prospects of total annihilation only increased the awesome respect for scientific powers. (Tytell 5)

タイトルによるこの発言は、『吠える』の第二部の以下の詩行に反映していることが分かる。

Moloch who entered my soul early! Moloch in whom I am a
consciousness without a body! Moloch who frightened me out of
my natural ecstasy! Moloch whom I abandon! Wake up Moloch!
Light streaming out of the sky! (SP 55)

この引用文が暗示しているように、「モーラック」は、語り手である「僕」に、特に「魂」(my soul) に「入った」ようである。アメリカにおける、戦後の文明化した社会は、人々を事実気づかせること無く抑圧し、別の言い方をすると、社会の持つ、「調整と適合」(coordination and adjustment) によって、当時の人間を支配していたのである。それゆえ、「モーラック」は、「自然の喜びを奪い僕を驚かせたモーラックよ!」(Moloch who frightened me out of my natural ecstasy!) という表現があるように、

人間から「魂」を奪ったのである。そのため、続く詩行に、「モーラックの愛の欠乏と人間欠乏よ！」(Lacklove and Manless in Moloch)とあるのは、理にかなったことだ。J・C・ホームズは、彼のエッセイ「ビート世代の哲学」(“The Philosophy of the Beat Generation”)において、このような人間性の欠乏した時代に対して、「壊れた回路」(broken circuit)という言葉を当てはめている。ジョン・タイテルは、以下のように「壊れた回路」について説明している。

It was as dangerous a condition as a hot electrical wire discharging energy randomly into the universe without a proper destination....
The emergence of the new postwar values that accepted man as the victim of circumstances and no longer granted him the agency of his own destiny... (Tytell 15)

この引用文から、1950年代のアメリカにおける、人間と社会の恐ろしい関係が読み取れるだろう。社会の表面上だけの豊かさは、人間を制するような力を持ち、人間社会を支配しているのである。そこで人間は、社会の完全な支配下に置かれている。さらにアレン・ギンズバーグは、彼の詩「パターソン」(“Paterson,” 1949)のなかで、このような状況における当時の実際の精神状態を具体的に告白している。

What do I want in these rooms papered with visions of money!
How much can I make by cutting my hair? If I put new heels on my shoes, bathe my body reeking of masturbation and sweat layer upon layer of excrement...
if in antechambers I face the presumption of department store supervisory employees, old clerks in their asylums of fat, the slobs and dumbbells of the ego with money and power

to hire and fire and make and break and fart and justify their reality of
 wrath and rumor of wrath to wrath-weary man,
 what war I enter and for what a prize! The dead prick of commonplace
 obsession, harridan vision of electricity at night and daylight
 misery of thumb-sucking rage.

I would rather to mad, gone down the dark road to Mexico, heroin
 dripping in my veins..... (SP 12)

blood streaming from my belly and shoulders
 flooding the city with its hideous ecstasy, rolling over the pavements
 and highways by the bayoux and forests and derricks leaving my
 flesh and my bones hanging on the trees. (SP 13)

この詩のもつ雰囲気は、「木に吊るされている僕の肉と骨は ゆだねられる方がよかったのだ」(leaving my flesh and my bones hanging on the trees) という一行が描いているように、重苦しい憂鬱の思いで覆われているようだ。冒頭の一行、「僕は何を欲するのだ ドルのヴィジョンで壁ははられたこれらの部屋で」(What do I want in these rooms papered with visions of money!) において、語り手は、彼が直面している現実にはひどく絶望している様子が分かる。さらに語り手は、「自分らの未来の収容所で働いている老事務員ら 金と権力に関するエゴ間拔けでそしてのろまで」(old clerks in their asylums of fat, the slobs and dumbbells of the ego with money and power), 「僕の参加する戦争 そしてその報いはなんだ!

それは平凡な強迫観念である死の苦痛だ」(what war I enter and for what a prize! The dead prick of commonplace obsession) という詩行が表しているように、周りを取り巻く状況に対して一層皮肉を持って、虚無的な態度を露にしている。そして最後には、語り手が完全に、彼が生きている現実世界によって打ちのめされている姿が描かれている。なぜなら語り手は、「狂気によって」、言い換えれば、「モーラックによって」「破

壊された僕の世代の最良の精神たち」を見て知っていたからである。

語り手は『吠える』において、「モーラック」の影響を力強く表現することによって、1950年代のアメリカの状況、そこに生活する人間の内面と、社会の外面の姿を描写している。それは、科学技術の発達、戦争による好景気によって、社会の表面上は豊かで「潤沢」の状態であったが、人間の内側は、すぐそこまで迫っている1960年代の混沌の時代を潜在意識の中で予見したような、実際はまさに「打ち負かされた、疲れ果てた」状態であった。ビート詩人アレン・ギンズバーグは、当時はまだ誰も自覚してはいなかったが、実は誰もが意識下で感じていた「恐怖」——繁栄によって強大化した画一的社会に押しつぶされるような意識——を敏感に感じ取り、詩集『吠える その他の詩篇』に描出した。彼は、当時の人間の魂を打ちのめしたアメリカ社会、言い換えると、人間に対し強力な破壊力を持つ「モーラック」に対し怒り、激しく反抗した。『吠える』においてギンズバーグは、J・C・ホームズの言う「ある種の精神の裸、魂の裸の状態」で、声だけを武器に、「モーラック」を破壊しようとした。そこには、強力な破壊力を持つ「モーラック」に対して、彼自身の中に、その破壊を破壊するための小さな「モーラック」のようなものが存在したのではないだろうか。ギンズバーグの中の「モーラック」、換言すると、彼の『吠える』声は、当時誕生したばかりのビート世代の叫びそのものであった。彼らは、「打ち負かされた、疲れ果てた」という定義をあてがわれたにもかかわらず、怒りを露にし、破壊を破壊するための「モーラック」をもち、力強く当時の確立した社会に対抗したのだった。

旧約聖書の『エレミヤ書』には、以下のような一節がある。

Then the Lord put forth his hand, and touched my mouth. And the Lord said unto me, Behold, I have put my words in thy mouth.

See, I have this day set thee over the nations and over the kingdoms, to root out, and to pull down, and to destroy, and throw down, to build,

and to plant. (Jeremiah, 1:10-11)

エレミヤ (Jeremiah) とは、ユダヤ王国末期頃、民にヤハウエへの回心を説き、新しい契約を預言した、古代イスラエルの大預言者、と一般的に言われている。『エレミヤ書』においてエレミヤは、当時のイスラエルに災いが襲いかかっていると考え、イスラエルを、「荒れ野」⁽⁵⁾ (a wilderness) と呼び、人々のことを「平和がないのに、『平和、平和』と言う」(saying, Peace peace; when *there is no peace*) と描写している。この点において、エレミヤとイスラエル、そしてアレン・ギンズバーグとアメリカという関係は、非常に似通っていることが分かる。伝統的ユダヤ教信者の父親をもち、自らもユダヤ教徒であったギンズバーグは、自分の中に大昔に国を預言した、エレミヤの姿を見ていたのではないだろうか。「ファン・ゴッホの耳に死を」の一行に、「詩人は僧侶だ」とあるように、彼は詩人としての自分の中に聖書との繋がりを意識し、エレミヤが主から「抜き、壊し、滅ぼし、破壊し、あるいは建て、植えるために」「諸国民、諸国王に対する権威をゆだね」られたように、彼は彼自身の中に当時のアメリカを憂うような、預言者と同じような姿勢をもっていたのではないだろうか。エレミヤと同様、「わたし (主)」から、「あなた (エレミヤ) の口に、私の言葉を授け」られたと信じたギンズバーグは、豊かさに隠れた、当時のアメリカ社会の歪みを預言し、彼の唯一の武器である自分の声を『吠える』にそのまま表したのである。

以上述べてきたように、ギンズバーグの『吠える』はまさにビート世代のバイブルである、と言うことができる。さらに、ギンズバーグ自身も「5つ目の『ビート・ジェネレーション』という言葉の意味は、ビートの文学、芸術活動の幅広い影響を受けた人々のことを意味する」と、先に挙げたインタビューの中で語っているように、彼の詩『吠える』は、現在なおさまざまな芸術活動に影響を及ぼしているビート世代の出発点である、と位置付けることができるだろう。

註

(省略説明)

J Journals Mid-Fifties 1954-1958

SP Selected Poems 1947-1995

- (1) 本論文での詩の日本語訳は、(筆者訳)の但し書き以外のものは、諏訪優氏の『ギンズバーグ詩集』東京：思潮社、1991.より引用する。
- (2) Merrill, Thomas F. *Allen Ginsberg*. New York: Twayne, 1988. pp. 56.
- (3) トッド・ギトリン氏は、“affluence”について、「『アフルエンス』は普遍的な広がりをもって50年代のアメリカ全体の状況を表していると考えられた。実際に『アフルエンス』は、長い間物質の生産と獲得を中心的な活動としてきた社会におけるれっきとした経済的心理的事実であった」と説明している。トッド・ギトリン著。正田三良、向井俊二訳『60年代アメリカ：希望と怒りの日々』東京：彩流社、1993. pp. 23.
- (4) ゴードン・ボール氏は、ギンズバーグのヨーロッパ旅行(1957-1958)について、“Ginsberg and Orlovsky's Moroccan and European trip temporarily strained their relationship. Nevertheless, it was rich in the variety of experiences it afforded these nearly indigent travelers. For Ginsberg, the extra-ordinary amount of European art and artifacts they beheld, coupled with his firsthand observations of social and political conditions from North Africa to Paris, greatly enlarged and enriched his perspective.”と述べている。Ginsberg, Allen. *Journals Mid-Fifties 1954-1958*. Ed. Gordon Ball. New York: Viking, 1995. pp. 329.
- (5) 本論文での旧約聖書の日本語訳は、「聖書 新共同訳——旧約聖書続編つき」東京：日本聖書協会、1987.より引用する。

参考文献

- Burns, Glen. *Great Poets Howl: A Study of Allen Ginsberg's Poetry, 1943-1955*. Frankfurt am Main: Peter Lang, 1983.
- Davidson, Michael. *The San Francisco Renaissance: Poetics and Community at Mid-century*. New York: Cambridge UP, 1989.
- Dickstein, Morris. *Gates of Eden: American Culture in the Sixties*. New York: Basic Books, 1977.
- Foster, Edward H. *Understanding The Beats*. Columbia: U of South Carolina P, 1992.
- Ginsberg, Allen. *Selected Poems 1947-1995*. New York: HarperCollins, 1996.
- . *Journals Mid-Fifties 1954-1958*. Ed. Gordon Ball. New York: Viking, 1995.
- Holmes, John C. *Passionate Opinions: The Cultural Essays*. Fayetteville, Arkansas P, 1988.

Hyde, Lewis, ed. *On the Poetry of Allen Ginsberg*. Ann Arbor: The U of Michigan P, 1984.

Kerouac, Jack. *On the Road*. London: Penguin, 1976.

Merrill, Thomas F. *Allen Ginsberg*. New York: Twayne, 1988.

Tytell, John. *Naked Angel, the Lives and Literature of the Beat Generation*. New York: McGraw Hill, 1976.

Waldman, Ann, ed. *The Beat Book, Poems and Fictions of the Beat Generation*. Boston: Shambhala, 1996.

諏訪 優訳『アレン・ギンズバーグ詩集』東京：思潮社，1991.

トッド・ギトリン著．正田三良，向井俊二訳『60年代アメリカ：希望と怒りの日々』東京：彩流社，1993.